

玄界海道 & 唐津街道コラボプロジェクト

訴求ポイント

北部九州に位置する玄界灘は、“沖ノ島”に象徴されるように古来から中国大陸や朝鮮半島および日本海沿岸域を往来する海上交通の幹線海道であり、古代海人族や中世の倭寇など、いわゆる国際派によって賑わっていた。彼らが航海の目印にしたものに、海岸斜面に捨てられた貝塚や、岬や丘の上に設けられた古墳などが利用されたといわれており、糸島半島から宗像地方にかけては、1,000基を越える中小古墳が残されている。こうした沿岸域には怡都国、宗像の君などの古代豪族が邑（ムラ）を形成しており、これらの拠点を繋いだ古代官道や中世の街道は、陸の道として時代とともに変遷を重ねてきている。

また、海と陸との交流拠点には浦（ウラ）と呼ばれる漁村が発達し、“筑前七浦”など形を変えながらも現在もほとんどが生き続けている。

時代を経た21世紀、海道は都市生活者にとって日常生活とはかけ離れたものとなっており、陸路の街道・幹線道路もJRや高速道路沿線の開発や交通需要の多様化に伴って、内陸部へ移動しその役割を大きく変えてきている。

一方、沿岸域の自然環境では、若松海岸から唐津にかけてはその延長において日本一と目される松原や砂浜など、玄界国定公園として豊かな自然環境を有しており、九州の中核的エリアである福岡・北九州圏域のオアシス的存在ともなっている。

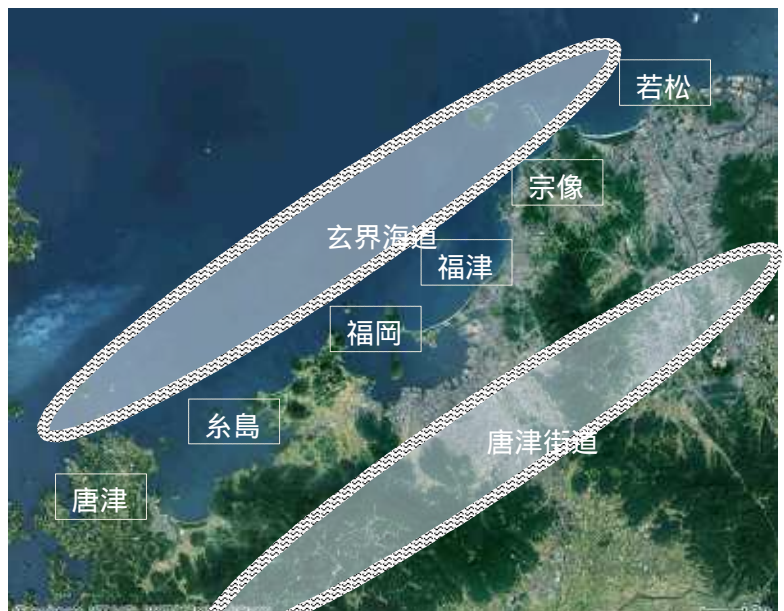
このように九州北部の玄界エリアは、地域構造が高度化していくなかでも貴重な歴史・文化・自然資源を有しており、少子超高齢化や地域間・世代間交流など21世紀型の新たな課題に対応していくためには、行政エリアを越えたこうした資源の活用や有機的連携が必要となっている。

本夢アイデアでは、進めぬ行政改革を待つことなく、地域資源を活用した利用者からのアクションプランとして海の遺産と陸の資源を再活用した「玄界海道 & 唐津街道コラボプロジェクト」を提案するものである。

プロジェクト 「学ぶ」

古代ローマに学ぶインフラ（ヴィア：街道、スタティオネス：駅）の再活用

古代ローマが征服地にヴィアと呼ばれる石畳の幹線道路（現代でいえば高速道路）やスタティオネス（日本では宿場）を建設して、沿線地域の経済交流に大きな役割を果たしたことは著名な逸話であるが、当玄界エリアにこれをあてはめると古代官道あり、唐津街道・宿場あり、海上交通の拠点となる浦ありで、陸路・海路のネットワークを再構築することによって、ゆとり社会への多様なインフラ整備にローコストで貢献することができる。



プロジェクト 「使う」

これからの社会構造をにらんだ多様な利用の拡大

本プロジェクトの対象とする北部九州圏は、約三百万人の人口を擁しているとみられ、今後の社会構造（低成長、少子超高齢化、ゆとり社会等々）を展望した時、陸域の資源活用に合わせて海（新たな海道）の活用をセットにして多様な利用に応じた展開が提案される。

陸域の行動スタイルとしては様々な道（街道）の機能に合わせた ウォーキング、ランニング、サイクリング、ドライビング や自然空間を活用した フライイング などが想定され、海域では、従来の海洋レジャーに加えて、**海からの浦巡り、古代海道ミニツアーなど** の企画が期待される。

陸の街道については、このエリアの歴史遺産でもある律令時代の古代官道をひもとくとともに、中世の残された唐津街道や宿場、関連の石碑などの周知・保存・整備・利用などの展開もプロジェクトプログラムに取り込む必要がある。

また、こうした行動「使う」の魅力づくりと機会拡大によって、余暇社会への対応や健康増進などの効果や、ニーズに応じて若松から唐津までを繋ぐ「玄界灘浦連盟（仮称）」の発足や、これに伴う浦の再整備やネットワーク化など新たなパートナーシップの形成なども期待される。

さらに、浦を結節点とした海路と街道のネットワークのバリエーション選択によって、リピート性や競争力向上などの効果も想定される。さらに既存の道の駅や物販店などもネットワークに組み込むことによって利用向上等の相乗効果も出てくるとみられよう。

プロジェクト 「稼ぐ」

地域活性化へのささやかな貢献 夢は世界遺産登録条件への下支え

本プロジェクトの推進によって、「使う」側のメリットだけでなく、大都市近郊における**グリーンツーリズムとブルーツーリズムのコラボレーション**としても「受け皿となる地元」への波及効果も期待される。

本プロジェクトへの参加によって交流人口や滞留人口の増加をもたらし、グッズの開発や食の開拓、スタンプラリー、さらにコンシェルジェの育成など人材開発にも貢献できる。

グッズの開発については、「浦グッズ」として地域のアイデアを結集するなど新たなコミュニティの形成にも役立つ。

さらなる夢は、こうした地域の歴史や産業遺産の活用や「もてなし・コミュニケの向上」などの成果によって、現在進められている「沖ノ島 世界遺産登録」運動の下支えとなることを期待したいものである。